

白いぼうし (あまんきみこ)

渡部 彬、浅野 真実、島本 明日香、

池田 由季乃、居林 奈津実、今中 祐希

一 作者と作品について

あまんきみこ(本名、阿萬紀美子)は、一九三一年八月一日、旧満州に生まれる。新京(現在の長春)に移り住み、敗戦時には女学校の二年生だった。帰国後大阪府立桜塚高等学校を卒業すると同時に結婚する。その後、勉学の意欲にかられ日本女子大学児童学科の通信教育部に入学、与田準一を知る。与田準一とは、昭和当時の日本の児童文学界において指導的役割を担った児童文学者・詩人である。その与田による勧めで坪田譲治主宰の「びわの実学校」に「くましんし」を投稿し評価を得て、その後もメンバーの一人となり投稿を行う。一九六八年「びわの実学校」の発表作品を集めた「車のいろは空のいろ」を出版し、第一回日本児童文学者協会新人賞を受賞し、同時に第六回野間児童文芸推奨作品賞ともなる。

「ちいちゃんのかげおくり」「おにたのぼうし」、本作品「白いぼうし」など小学校の教科書へ掲載される作品も多く、上品なユーモアに包まれた作品は、日本の風土や文化に根付いた情緒や親しみやすさと同時に、外国児童文学のような深さとロマンチズムがある。自身が幼少から好きだったという宮沢賢治とも通じる、どこまでもやさしい

世界観が特徴的。また、その生まれ育ちから戦争そのものや、満州での「支配者階級」であった自分自身の存在そのものの罪悪感が作品の根元にある、と語った対談もあることから、この作者の作品には「戦争」の存在が根強くあるとされる。

本作品「白いぼうし」は前述「車のいろは空のいろ」という短編集の中の作品の一つ。この「車のいろは空のいろ」はタクシー運転手の「松井さん」を主人公として、松井さんが出会う様々なお客さんとそのエピソードをお話としたシリーズの短編集である。

二 叙述について

ほりばたで乗せたお客のしんしが、話しかけました。

「ほりばた」とあることから、お堀沿いでお客をひろったことがわかる。お堀があるということから、その場所が城下町ではないかと考えられる。「しんし」とあることから、お客はビジネスマン風の人ではなく、よそ行きの上品な服を着た人であると考えられる。また、年配



のロマンスグレーという印象も受ける。「話しかけました」とあることから、しんしはそれまで無言であったがここで初めて口を開き、しんしのほうから話しかけたことがわかる。また、思わず話しかけてしまうほど、夏みかんの匂いが車内に充満していたとも考えられる。

「ほう、夏みかんでのは、こんなににおうものですか。」

「ほう」とは、「感嘆し、または驚いたときに発する語」である。しんしは、夏みかんはこれほど強いにおいのするものだとは思っていなかったために、車内に充満するほどのおいが夏みかんのものであると知り、驚き、感心していることがわかる。「夏みかんでのは」というくだけた口調がみえるので、しんしは初対面の松井さんとも親しげに話している様子がわかる。「こんなに」とあるので、においの程度のはなはだしさを強調している。文末の「ものですか」からも、しんしが驚き、思わず松井さんに聞き返している様子がうかがえる。

「もぎたてなのです。きのう、いなかのおふくろが、速達で送ってくれました。においまでわたしにとどけたかったのです。」

「もぎたてなのです」は、しんしの、夏みかんはこんなににおうものなのかという言葉に対して、もぎたてなのでにおいが強いのだと返答したものである。「いなかのおふくろ」とあるので、松井さんの母親はいなかに住んでいるが、松井さんは一緒に住んでいないということがわかる。「においも」ではなく「においまで」とあるので、夏みかんを送ってくれただけでもうれしいのに、そのにおいまでも送ってくれたという気持ちが含まれていると考えられる。「とどけたかったのです」とあるので、松井さんは母親に確認はしていない。しかし、母

親の思いを想像して好意的に受け止めていることがわかる。

「ほう、ほう。」

二度も「ほう」を繰り返すことで、しんしが松井さんの話を興味深く聞き、感銘をうけながら相づちを打っていることがわかる。

(おや、車道のおんなすぐそばに、小さなぼうしが落ちていたぞ。風がもうひとふきすれば、車がひいてしまうわい。)

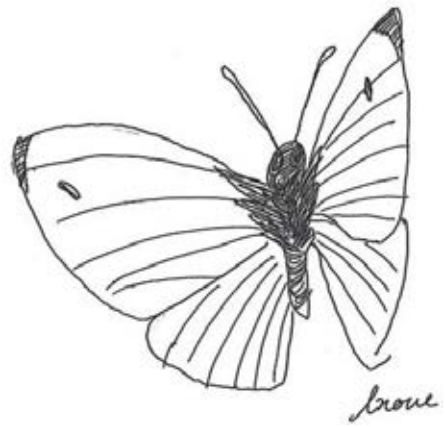
「おや」とあり、松井さんはぼうしが落ちていることに驚きと疑問を抱いている。「落ちていたぞ」と「ぞ」を使うことで、車道のおんながぼうしが落ちていたという滅多にない今の光景を自分に言い聞かせていることがわかる。「おんなすぐそば」とあり、ぼうしが車道ぎりぎりのところに置かれていることが強調されている。「風がもうひとふきすれば、車がひいてしまうわい」という表現は、ぼうしが今にも飛んでいきそうな様子を表している。

緑がゆれているやなぎの下に、かわいい白いぼうしが、ちよんとおいであります。

やなぎがゆれているではなく、「緑がゆれている」とすることで、柳が緑色をしているということや、柳が少量ではなく結構な量あることを表している。「ちよんとおいであ」とあり、ぼうしの今にも飛んでいきそうな軽さやぼうしの小ささが強調されている。

そんな松井さんの目の前を、ちようはひらひら高くまい上がると、なみ木の緑の向こうに見えなくなってしまうました。

「ひらひら」とあるので、松井さんがふりまわすぼうしをかわしながらちようが飛んでいることがわかる。「高くまう」ではなく「高くまい上がる」とあるので、ちようが結構な高さ（少なくとも松井さんの目線よりは高く）まで飛んだことがわかる。「なみ木の緑」とあるので、柳は車道沿いに何本か植えられている。「見えなくなってしまう」とあり、松井さんの残念な気持ちが読み取れる。



（ははあ、わびわびにこにおいたんだな。）

「ははあ」とあり、松井さんはちようを捕まえておくためにここにぼうしがおいてあったのだと合点がいったことがわかる。そして、ちようを逃がしてしまったことに対して、申し訳ないという気持ちよりも、子どもがしたであろうぼうしでちようを捕らえておくという行為に、なにか微笑ましい気持ちが入み上げてきたのであろう。

小さなぼうしをつかんで、ため息をついている松井さんの横を、太ったおまわりさんが、じろじろと見ながら通りすぎました。

松井さんは「ため息をついて」おり、ちようを逃がしてしまいどうしようか困っている様子が読み取れる。おまわりさんは、「じろじろ」見ているため、自転車ではなく比較的じっくり見れる徒歩で通りすぎたことが予想される。このおまわりさんの描写から、松井さんが車か

ら降りて白いぼうしを片手にため息をつく姿は、周囲から見ると少々不審な姿であることがわかる。

ちよつとの間、かたをすぼめて立っていた松井さんは、何を思いついたのか、急いで車にもどりました。

「ちよつとの間」とあり、ちようを逃がしてから次に車に夏みかんを取りに行くまでは、ほんの数分のことであったことがわかる。「かたをすぼめ」とは、「寒さや肩身の狭さなどのために、元気なくしよんぼりとしたようす」という意味なので、松井さんはちようを逃がしてしまいしよんぼりしていると考えられる。

車にもどると、おかつぱのかわいい女の子が、ちよこんと後ろのシートにすわっています。

「ちよこん」とは、「小さくじつとかしこまっているさま」という意味である。女の子のかわいらしき、幼き、小さきといったものが強調されるように感じられる。

「道にまよったの。行っても行っても、四角いたて物ばかりだもん。」

「まよったの」とあり、少女らしい口調であると同時に、聞き手（松井さん）に対して、道に迷ったことを断定的に主張していることがわかる。「行っても行っても」とあるので、女の子はすでにしばらくの間辺りをさまよっていたことがわかる。「四角いたて物」とは、ビルのように外見に特徴のない直方体の建物であり、「ばかり」とあるので、それらの建物しかなく、とても迷いやすい地域だと想像できる。「だもん」とあり、松井さんに強く訴えている様子が読み取れる。

「ええと、どちらまで。」

「ええと」とあり、少しとまどってはいるものの、すぐに「どちらまで」とたずねていることから、いつのまにか女の子が一人で客席に座っていたという状況にも、松井さんがあまり動じていないことがわかる。

「え？ ……ええ、あの、あのね、菜の花横町ってあるかしら。」

「え？」とあるので、松井さんに行き先を聞かれて女の子がとまどっていることがわかる。「菜の花横町ってあるかしら」と、行き先を答えるのではなく、まずそのような地名があるかどうかをたずねていることと合わせて考えても、女の子は自分の行きたい場所の正確な地名を知らないということと、この車がタクシーであること、タクシーは行き先を告げてそこに連れて行ってもらおう乗り物であることを知らないということが考えられる。なので、松井さんに行き先を聞かれてとまどったが、「……」の部分で行きたい場所に連れて行ってもらえたと理解すると、「あの、あのね」と勢い込んで、期待を込めて話しかけていると考えられる。

「あのぼうしの下さあ。お母ちゃん、本当だよ。本当のちょうちよが、いたんだもん。」

「あのぼうしの下さあ」と語尾を強く言っていることから、男の子が、ちょうちよはあのぼうしの下にいたのだと半信半疑のお母さんに主張しなかったのだと想像できる。「本当」という言葉を繰り返しているの

で、お母さんにちょうちよがいたことを信じてほしいという男の子の気持ちを読み取れる。「だもん」から、ちょうちよがいたことを強く訴えていることがわかる。

水色の新しい虫取りあみをかかえた男の子が、エプロンを着けたままのお母さんの手を、ぐいぐい引っぱってきます。

「新しい」とあることから、男の子が買ってもらいたての虫取りあみで、ちょうちよを絶対に捕まえたいと張り切っていることが感じられる。「エプロンを着けたまま」とあることから、男の子が家事の最中のお母さんを連れてきたことがわかる。また、男の子の家は近くにあると考えられる。「ぐいぐいと」引っぱっていることから、男の子のちょうちよを早く見せたいという意志が感じられる。それに対して、引っぱられているお母さんは、状況をよくわかっていなかったり、本当にちょうちよがいるのかと疑ったりしているのではないかと想像できる。「きます」と現在形になっていることから、男の子はまだ帽子のところまでたどり着いておらず、松井さんから見てまだ距離のあるところにいることがわかる。

客席の女の子が、後ろから乗り出して、せかせかと言いました。

「乗り出して」とあるので、体を前の方へ出し、松井さんの近くで言っていることがわかる。「せかせかと」とあり、女の子があわてており、落ち着かない様子が読み取れる。

（お母さんが虫取りあみをかまえて、あの子がぼうしをそうつと開けた時——。）と、ハンドルを回しながら、松井さんは思います。

(あの子はどんなに目を丸くしただろう。)

車が動き出した時に聞こえた男の子のセリフから、お母さんと男の子の動きを想像していると考えられる。「ぼうしをそうと開ける」という表現から、中に入っているちようが飛んで行ってしまうように、男の子は慎重に帽子を開けるだろうと、松井さんが想像していることがわかる。「ハンドルを回しながら」と書いてあるので、カーブした道を運転していることがわかる。「開けた時——」のように「——」を書き、松井さんの想像と想像の間に運転しているという行動を書くことによって、女の子に急かされて運転しつつも、男の子が気になり続けていることがよく感じられる。

すると、ぽかっと口をOの字に開けている男の子の顔が、見えてきます。

「見えてきます」と書かれていることから、松井さんが男の子の顔を思い浮かべたということがわかる。

「ふふふっ！」

ひとりでにわらいがこみ上げてきました。

「ふ」で笑っていることから、口を開けて笑っているのではなく、微笑みながら含み笑いをしていると考えられる。ちようが夏みかんに変わってしまったことに驚いている男の子を想像して笑いがこみ上げてきたのだろう。その笑いには、驚かせたといういたずら心と満足感が入り混じっていると考えられる。

「おかしいな。」

松井さんは車を止めて、考え考え窓の外を見ました。

先ほどまで乗っていた女の子が居ない、どこへ行ったのだろうかと思に思っている。車を止めたことから、落ち着いて考えようとしていること、冷静であることがわかる。「考え考え」と二回書かれていることから、一生懸命に考えていることがわかる。

その上を、おどるように飛んでいるちようをぼんやり見ているうち、松井さんには、こんな声が聞こえてきました。

「おどるように」と書かれていることから、松井さんにはちようたちが楽しそうに嬉しそうに飛んでいるように見えたのだろう。もしかすると、この時点で、タクシーに乗せた女の子が先ほど逃げたであろうだったと気づいていたのかもしれない。「松井さんには」とあるので、声が聞こえたのは松井さんだけであり、周りの人には聞こえていないと考えられる。

「よかったね。」「よかったよ。」「よかったね。」「よかったよ。」

「よかったね。」は、松井さんが逃げたちよう以外の他の何か言っており、「よかったよ。」は、松井さんが助けたちようが言っているように考えられる。ちよう以外の他の何かと書いたのは、他のちようだけでなく、クローバー、たんぼぼの声かもしれないと考えたからである。また、語尾に「ね」を付けて、相手に同意を求めていることから、「よかったね」と言っているのが、松井さんが逃げたちよう以外であると考えられる。同じ言葉を二回繰り返すことで、リズムがあり、柔らかさ、温かさ、かわいらしさが伝わってくる。

車の中には、まだかすかに、夏みかんのおいがのこっています。

ここで、帽子の下に置かれて、物語からは退場したはずの「夏みかん」が再度登場している。これは、物語のキーワードである「夏みかん」を最後に登場させることで、物語に統一感を持たせるためであると考ええる。また、前文までで、「よかったね」「よかったよ。」という声が聞こえてくるという幻想的な光景を描いているので、「夏みかんのおい」という現実的に嗅覚に訴えるものを登場させることで、読者を現実に戻すという役割を担っているとも考えられる。

三 考察

(一) 女の子の正体

本作品では以下に挙げたような状況から女の子がもしろちようであると解釈できる。(◎が最も有力な根拠であると考ええる。)

- ・ 松井さんがもしろちようを逃がした後に女の子が現れる。
- ・ 女の子が疲れているのは、男の子に追いかけてまわされて捕まえられたからであると考えられる。
- ・ 女の子が「道にまよったの。行っても行っても、四角い建物ばかりだもん。」と言って迷子になり、菜の花横町に行くことを松井さんに要求している。
- ◎ 男の子が戻ってくると、女の子は後ろから乗り出して、せかせかと、「早く、おじちゃん。早く行ってちょうだい。」と言っている。
- ・ 女の子が急にいなくなる。
- ・ 女の子がいなくなった野原で松井さんはたくさんのおじちゃんを見た。
- ・ ちようがとんでいる野原から、「よかったね」「よかったよ」というちようたちの声が松井さんに聞こえてきている。

- ・ 松井さんのほかの作品「車のいろは空のいろ」でも、動物の化身が出てくる。

このような状況を根拠とし、女の子＝もしろちようであると解釈した。

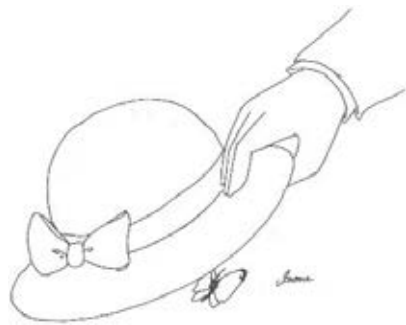
(二) タイトル『白いぼうし』について

この『白いぼうし』という作品では、ストーリー上、私たちの印象に残るのは

夏みかんであったり、ちようあるいはそれを思わせる不思議な女の子である。そのなかで、なぜ、あえて「白いちよう」でも「夏みかん」でもなく、「白いぼうし」がタイトルに使われたのか。

松井さんが見つけた「白いぼうし」は、たけ山ようちえんのたけのたけおくんのものである。この白いぼうしの中に松井さんは逃がしてしまったちようの代わりに夏みかんを入れておくわけであるが、その後、ぼうしのもとへ戻ってきた持ち主のたけおくんやそのぼうしがどうなったかは描かれていない。ぼうしはストーリーのクライマックスには直接の関わりがないのである。

しかしながら、この白いぼうしを松井さんが見つければ、松井さんはその後の不思議な体験をすることはなかった。このストーリーで大部分を占めているのは松井さんとちようとの関わりであるが、白いぼうしは、ここで松井さんとちようを引き合わせる重要なキーとなっているのではないだろうか。道端に置いてあったのが、虫かごや虫とり網であれば、そこに何かが捕まえてあるのだと察して、松井さんは車を停めることはしなかったかもしれない。しかしそれがぼうし



であり、色も白という目立つ色であったために、松井さんの目に留まり、松井さんとちやうとの出会いに繋がった。

つまり、この「白いぼうし」はストーリーを展開させる重要なきっかけであると言える。その点で、この作品のタイトルは『白いぼうし』となったと考えられる。

